

舞踊譜の理念と実際

大貫秀明

企画趣旨

本学会創設20周年を記念し、数年前よりその記念事業の一環としてこれまでに行われたシンポジウムの報告集を編む計画が推進されてきた。今回のテーマ『舞踊譜』は、その計画が立ち上げられた時の「章立て」に、近々シンポジウムを実施する項目として盛られたものだが、諸般の事情から暫し未執行になっていたものである。そうした経緯のなか、幸か不幸か舞踊界においては舞踊譜に対する興味が急速な高まりをみせた。その火付け役を果たしたのは何といてもW.フォーサイスであり、また、M.カニングハムである。このふたりはそれぞれ舞踊譜がもつ分析性、記録性、再現性、そして創造性といった特性に対し、3次元のメディア（CD-ROM）の援用をもって新しいアプローチを果敢に実行した。しかも、そこにはゲーム性も潜在したことから、その波及力は強かった。そこで、皮肉にもそうした現象に刺激されるかたちで従来の舞踊譜の形式が再考される機会を得ることとなったわけである。もちろん、そうした突出した現象の他に、舞踊譜の重要性を説くにあたり、舞踊をより堅固な学問の領域として存立させる手段としての舞踊譜の利用という考えの着実な高揚も、今回のシンポジウム実現の一助となったことは否めない。さらに、ラバノテーションの世界で長きにわたりご活躍であるC.ウォルツ氏（日本女子体育大学）の退職・離日が平成9年度終了時といった事情もそこに絡み、今回のシンポジウムの開催に対する機運は一気に高まり、ついに実施に至ったというわけである。

そこで、舞踊譜を取り巻く状況を広く勘案しながらテーマの絞り込みを行い、最終的には標記のような『舞踊譜の理念と実際』というものに落ち着いた。そして、昨今の舞踊譜の世界における動向を睨みつつ、舞踊譜の原点を見つめる、といった観点から3つの形式の舞踊譜にそれぞれ深く携わる方々からお考えを披露して戴くこととなった。

実施報告

「なぜ、わたしにはこの舞踊譜なのか」、「舞踊譜におけるニュー・メディアの台頭」という共通の“必修課題”を事前にお渡ししておいたこともあってか、お三方ともそれぞれが携わる形式の意義解説には説得力があり、とても興味深かった。

ウォルツ氏は「動きの譜の価値」という演題を掲げ、舞踊譜を語る以前に、広く動きを対象とした譜の価値について持論を展開しはじめた。分析、

記録、そして再現・伝承の手段としての動きの譜の教授・学習の必要性を説きながら、終盤には動きの譜の一形式としてのラバノテーションの優位性を強調なさった。その過程では、舞踊譜と舞踊の著作権の関係という興味深い内容も含まれ、フロアの注目を逸らすことのないお話しであった。また、関連するニュー・メディアの台頭については、ラバノテーションと対立する性質のものではなく、むしろ積極的な共存こそが要請されてしかるべきである、ということを経極めて論理的に解説なさった。

わざわざ和服にお着替え戴き、殺風景な会場に艶をもたらして下さったのが日本舞踊の西川氏であった。日本舞踊の舞踊譜の歴史を簡潔にお話し下さった後に、現下西川流で用いられている人体の略図（動きの結節点の図、および詞章と簡単な語句説明）入りの舞踊譜の紹介を、実演を交えてなさって下さった。外部の舞踊譜を取り巻く動向を熟知したうえで、なお現在使用の形式に固執するのか、その理由を明解にお話し戴いた。「動きの習得だけに止まらず、舞踊の本質に迫るには現在の舞踊譜の形式が現時点では最良であり、そこに師と弟子の関係の所産として生気を持った再現・伝承が生じる……」、という表現には実践者としての自負が感じられた。そうした自負の裏付けか、貴重な資料を惜しげもなく配付戴いた。それについてはただただ深謝。

舞踊における動き、ことに民俗舞踊における動きに対する深い理解を示されたのが須藤氏の発表であった。その理解の深さが独自の舞踊譜にもよく反映されており、その精度の高さに敬服した。文化庁より委嘱されて民舞の保存事業に係わるお仕事の間で用いられている譜だけに、ご自身ではメモの域を出ないと仰るものの、高度なシステムになりえているという印象を強く抱いた。飛び入りの実演参加者も得て、楽しさも加わった発表であった。

フロアより戴いた質問のうち、多くの者の興味を惹いたものに再現における「動きの質と舞踊譜の問題」があった。ウォルツ氏だけが、ラバノテーションにおけるその問題の解決法を説かれたことが妙に印象的であった。筆者自身も多少ではあるがラバノテーションに覚えがあることから、氏の主張も理解できなくはなかったが、この点について頑に沈黙を守る他のお二方のシンポジストになぜか親近感を覚えた。意図的に記さない部分を残すことにより、逆に生きた再現が可能であることが舞踊には多い気がする。作品の“Reconstruction”と“Re-animation”、この差異は微妙にして実に深い。これより先は“過激な”私見が入り込み、「報告」の域を超える恐れがあるゆえここにて筆を止める。